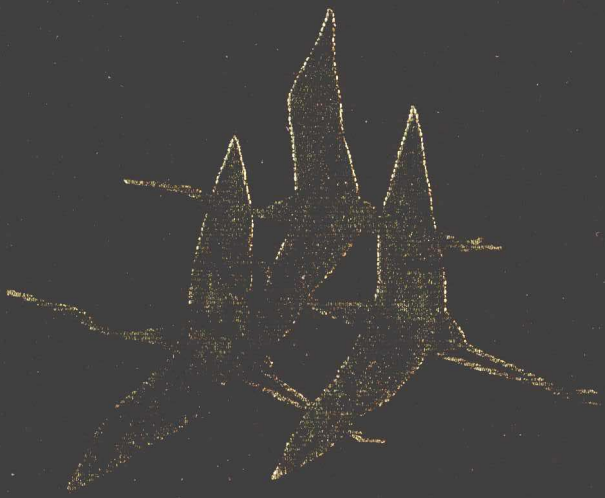

監修＝桑田忠親／村上元三／尾崎秀樹

荘八全集 44

葉周作 他

講談社

山岡荘八全集 44

千葉周作 他

著者 山岡荘八
装幀 加山又造／蟹江征治
発行者 加藤勝久
発行所 株式会社 講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一
電話 東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)
振替 東京八―三九三〇

印刷所 凸版印刷株式会社
製本所 大製株式会社
製函所 株式会社岡山紙器所

第一刷発行 昭和五十九年五月二十六日

定価 一六八〇円

©一九八四 藤野稚子 ISBN4-06-129298-6 (0)(文芸)

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えします。

Printed in Japan

目次

図説・千葉周作（カラー）　三
千葉周作
桜系図　二六九
跋――　二九三
巻末特集
日本剣客列伝〈4〉　小野次郎右衛門　津本　陽　二九五
別刷　タイム・トラベルの楽しみ〈40〉　宮脇俊三

挿

絵

鴇

田

幹

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

千葉周作

恩讐

鬼首峠に暮色がせまると、荒雄川の奇勝奇岩はすべて鬼に見えてくる。それも大木に吊られて眺める風景だった。大鎹、小鎹の山容がその鬼どもを追い立てて、野猿の叫びは魂消る悲鳴を連想させた。

「畜生ッ！」

と、河神社の谷にせり出た大山欅の枝の先で於菟は叫んだ。

「この於菟吉がそれほど怖ろしいのか。なぜ尋常に勝負をせぬ。これッ、誰も居らぬのか。みな遁げだしてしまったのか」

後手にしばられて仔狸かなにかのように谷へ吊り下げられている。吼える声はたくましくとも、すでに聞く人々は引揚げてしまっている。鬼面と鬼面の間にしぶく飛沫の白さがつき刺すように眼にしみた。

「畜生、出て来いッ」

とまた於菟は叫んだ。が、その声がむなしい谺をかえして来ると、もう以前のように身悶えはしなかった。はげしい語気の罵声とは反対に、

（いよいよ死ぬのか……）

まるで他人ごとのように自分の運命をつきはなす。決して悔いてはいなかった。

（これでいいのだ）

と、無理にうなずき、生死何者ぞと気負ってもいる。もともと無事に帰れるつもりで花山村を出て来たのではなかった。

この玉造郡一帯に無双の剣客として蟠居する荒尾宮内に、両親の怨みを思い知らせようとして出て来たのだ。それにしても何という狡猾無礼な相手であろうか。十五歳前髪立ちの於菟吉が、正面から堂々と千葉幸右衛門の二男と名乗って手合せをのぞんでいったのに、

「——千葉の倅ではまさかに立合いも相成るまい。そちは何か誤解して、ひどくわしを怨んでいるそうだの。まあよい。荒湯にでもひたってゆっくり二、三日遊んでゆくがいい」

まるで肉親の甥でもあしらうような甘言で、
「――手筋はよいと聞いているが、わしに勝とうと思うたら、もう少々修業して来ることじゃ。分ったかな」
そんな言葉で弟子たちの手前を取繕った。
むろん於菟はひかなかった。そんな手に乗るものかと眼を怒らして詰めよった。
が、その結果は？
弟子どもに手取り足取りに縛りあげられ、誤解の解けるまで谿の風に当るがよいとこのざまだった。これほど卑怯な奴と知ったら、正面から試合などは挑まずに、いっそ無言で斬捨つべきだった。が、しかし今はそれも手遅れ。丈夫は事に後悔せず、吊りあげられた樹上で宮内を罵りつづけて死んでやるより他にない。
吊り下げられたのは今朝の四ツ（十時）。が、もうどこかで暮六ツ（六時）の鐘が鳴った。
何しろ、大山欅の枝から谷への宙吊りなのだ。手も足もしびれてくるし、時々怒りに眼もくらんだ。しかし闘志は微動もしない。
（いよいよ死ぬのだ……それでいい）
峠の頂きはだんだん紫の空に溶け込み、いつかチカチカ星が光っている。
昼にはいっぱいだった見物の村人も宮内の弟子たちに追い払われて姿を消し、やがて野猿の叫びも消えた。
月が出るのであろうか。
大鏑の山嶺が硝子絵のように青味を加えてうきあがると、眼の下の谿谷のはるかな底で河鹿の声がしだしている。
「畜生ッ出て来い……」
もう一度於菟は叫んで、こんどは谷間に飛び交う蛍を見つけた。
於菟が生れたときには父の千葉幸右衛門はすでに陸前栗原郡花山村に住んでいた。母と兄の又市と、そしてやがて弟の定吉もそこで生れて、表面はいかにも平和な家庭であった。於菟はそこで九ツまでは何も知らぬ野生の仔鹿で育って来た。
父は寺小屋の師匠の他に乞うものがあれば剣術を教えたり薬草類を村人にわけたりして、決して豊かではなかったが、さりとて食べるに困る暮しでもなかった。
かげから、この辺りでの大庄屋、父の兄の伊藤幸兵衛からの仕送りがあるからだった。
その幸兵衛の家を子供たちはいつからか「――本家――」と呼んでいる。その本家の嫂は、長男の又市や末子の定吉にはやさしかったが何故か於菟をひどく憎んだ。於菟が遊びにゆくと、
「――お前は外で遊びなさい」
それは於菟が九ツの年の梅雨どきだった。土蔵の戸前で

従兄弟たちと遊んでいた於菟が、屋敷の外へ追い出され、雨にぬれてぼんやりと立っていると、通りかかったのは、生れたばかりの於菟に、しばらく乳を呉れたお玉後家であった。

お玉後家は、以前にずっと千葉家へ女中奉公に来ていたとかで、雨にぬれた於菟を見ると眼をひきつらせて舌打した。

「ほんとにこの子ばかりみんなでいじめくさって」

そして、自分のあばら家に於菟をつれ込み、草餅を焼いて呉れながら、何故於菟ばかりがそのように本家からうとんぜられるかを涙まじりに聞かせてくれた。

それに依ると父の幸右衛門は隣りの玉造郡鬼首の郷士、荒尾太左衛門の息子宮内といっしょに、相馬中村藩から藩士の指南を托されている北辰夢想流の達人、千葉吉之丞のもとで内弟子になっていたのだという。

そして大ぜいの弟子の中で、この二人だけが群をぬいて手筋がよかった。

「――いったいどちらが先生のあとを取るか」

「――わしは荒尾だと思うが、しかし先生はお嬢さん想いでもあるからな」

その頃娘の意志によって後継者を決めるような習慣はなかった。どこまでも腕と人物、したがって千葉家の娘は、その父の決定した後継者の妻になるべきものであった。

後継者は幸右衛門に決定し、千葉吉之丞の一人娘の嘉乃は幸右衛門を養子に迎えた。

この決定に荒尾宮内は憤然として千葉家を去り、それが不幸の種になった。

幸右衛門と嘉乃の間に長子の又市が生れて間もなく、父の吉之丞は亡くなって、家督をついだばかりの幸右衛門の家に、ある夜強盗が押入った。

折悪く幸右衛門はその日家に居なかった。盗られたものは金子十五両と、主君から拝領の津田越前守助広の一腰。それに吉之丞の認めた夢想流兵学伝書の一巻が無くなっていたのである。そしてどこからともなく、その夜嘉乃は、自分と嬰児の生命を助かろうとして強盗に犯されたという風評がたった。

いや、それだけではない――

その夜の強盗は実は荒尾宮内で、以前に宮内と歓を通じていた嘉乃が、幸右衛門の留守に宮内を引入れ、家宝の刀と兵学伝書を自分の方から与えたのだ――そんな噂がまことしやかに流布された。

そしてその噂と共に懐妊られたのが二男の於菟であった。こんな風評が立ったのでは幸右衛門は中村にいられなかった。彼は主家を浪人して、みごもった妻と長子をつれて故郷の花山村に帰ったのだが本家でもまたその噂を気にしているのであった。もしそれが事実なら於菟は荒尾宮内の胤という、世にも奇怪なことになるのだが、お玉後家は

きびしくそれを否定した。
「そんな奥さまじゃございましねえ。ただ奥さまは何事にも言訳さっしゃらぬ癖があるで、その癖を知っていてみんなあの、荒尾宮内が言いふらした怨みの悪口に違げえねんです」
お玉後家にその事を聞かされてから、於菟はがらりと人が変った。少年らしい潔癖さで彼の憎悪は荒尾宮内にむけられた。
「――母までをそのような。許せぬ！　断じて許しておくものか」
彼はその日から竹刀をけずり父に稽古をせがんだ。お玉後家に言われた事はむろん誰にも言わなかったが、そう思ってみると、父と母の間にもその事で時々悲しい反目が感じられる。そのたびに卑怯な荒尾宮内に対する於菟の怒りは蓄積された。
（今に見ろ！　必ずこの於菟が……）
そうした少年の悲憤を知らない父の幸右衛門は、於菟の手筋に眼をつけて熱心に教えたので栗原郡では、何時か於菟は「千葉の小天狗――」と呼ばれるようになっている。
その於菟が、正面から堂々と父の怨みを言い立てて試合を挑んだばっかりにこの始末であった。無念と言えばこれより無念なことはない。が、於菟はもうそれは考えまいと思っている。
考えると五体を引裂かれるより辛かったし、その辛さに負けるときっと卑怯な哀れさが自分の態度ににじみ出るに違いない。
（誰が糞ッ！）
月が出ると足下の奇岩はまたさまざまに表情をかえた。あやしく屈折してゆく光と影の鮮やかな明暗に、蛍が消えたり現われたりする。
いったい人間は、こうして宙につり下げられて何刻ほど生命が保てるものなのか。気がつくと腹は空っぽだったし、足はすっかり痺れかけている。
（明日一日位は持つかな？　それとも今夜で終りかな……？）
だんだん静まり返ってゆく月下の谿谷では、いつか渓流の音までが暗示にとんだ人語に聞える。そして、どれだけ時が経ったのか？　いよいよ冴えた山間の月が、神社屋根をかっきりと水の間に描きだしたとき、吊り下げられた自分の軀がずしっと一段落ちた気がし、於菟はおどろいて眼をひらいた。
「誰だ！」
この綱の端を結いつけた駒止石のそばにたしかに黒い影が一つ。
「だ……だ……誰だッ！」
するとそのかげは、静かな声で空を仰いだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「荒尾宮内の一子春太郎、綱を解いて助けて進ぜる」
「な……なにッ、宮内の倅が助けると。助けはいらぬ。手を触れるな。この於菟が敵の憐れみを受ける男と思うかッ」
しかし、相手はそのままするすると綱をのばして、於菟の軀はトンと地べたへ抛り出された。

とっさには立つことも出来ず、坐ることも出来なかった。足が地べたへ着くといっしょに横ざまに倒れていって、ぶざまな姿でもがくところをパラリと縄を断ち切られた。
「う――うぬッ。誰が頼んで助けるのだ。縄を切ったら喰いつくぞ」
あやうく起き直って喚き立てる於菟の前へ、これは於菟より二つ年上の宮内の長子春太郎は黙って刀と笠と草鞋をおいた。
「いずれ又会おう。身仕度なされ」
その声の静けさが、カーッと於菟を逆上させた。
「わけを聞こう。これは父御の指図なのかッ」
春太郎は首を振った。
「お身がお身の父御を信ずるように、この春太郎も父を信ずる。今日はひとまず引揚げて、もう一度よくお身の考えに誤りないかどうかを調べられるがよい」
いつもの於菟ならば兵法者心得の第一にある、昂ぶる勿れの戒めを忘れる筈はなかったのだが、今日は全く別人だった。あまり惨めな諦らめのあとだけに感情も頭も紊れきっている。あるのはただ叩きつけたい憤怒と屈辱だけなのだ。
於菟は出された中から刀だけを掴みとると、ヨロヨロと立上った。
「抜けッ！　こうなったらお身が相手だ」
相手は呆れたように一歩下がった。
「於菟どの、お身はその軀で……その足並みで……この春太郎を斬ろうと言われるか」
「斬る斬られるを、何んでおれが知るものか。抜けッ！」
また刀を杖にして、ヨロヨロッと寄ってゆく。まだ支えがなければ立ってもいられぬ癖に、トンと相手にぶつかったら、そのまま、捨身の抜打ちをかける気なのだ。春太郎は声をはげました。
「於菟どの、お身はそれで千葉の子息かッ」
「な……な……なにをいう」
「落着きなされッ。父の気持がわからぬのかッ」
「分っているからやって来たのだ」
「父宮内は、お身を大成する手筋と見込んで相手にせぬのだ。その父の心のわかる春太郎に、お身と斬合いが出来ると思うか」
「ほざくな。それならば何でこのおれにあんな恥辱を与えたのだ。荒尾の家例は、強い相手と竹刀を合せず、宙吊り

すると決めてあるのか」
「はてさて分らぬ。それはお身が門弟相手に暴れすぎた、自業自得と気づかぬのか」
「気づかぬ！　気づくものか。さあ抜けっ。抜いた上で斬れるものなら斬ってみろ」
地上に描かれた木立の縞目を踏みこえて、また於菟がヨロめきせまると、春太郎は歩きかけの子供をあやすようにそれを避けた。
「危いッ！　この下は千仞の谷ではないか。於菟どの！　しずまれ……」
「遁がすものか。しずまるものかッ。抜けッ。抜かぬかうぬッ！」
「危いと申すに……これ、わしがもし躱したらお身は谷へおちるのだ……」
春太郎は、向うみずにぶつかる相手を谷へ落すまいとして、避けては押え、押えては避けてゆく。それが於菟には、いっそう口惜しくやりきれなかった。
「斬れッ！」
トンとこんどはぶつかった。瞬間於菟は反動でそった軀の中心をもとにして、抜打ちにサッと刀を横に払った。
「あっ！」
春太郎はパッと後にとんで白刃を避けた。と、そこはすでに地上ではない。
月の光に迷彩された谷の空間。白刃をもったまま於菟がどしんと尻餅ついたときには、春太郎の姿はもうあたりから消えていた。
於菟は笑った。到頭勝った！　兵法に小ざかしい手心は禁物なのだ。勝つか負けるかの二つしかない。春太郎は於菟の闘志を見誤って負けたのだ。
於菟はあわてて断崖のふちへ這いより、月光にかすんで底の見えない谷をのぞいて、また笑った。
「アッハッハッハ。宙吊りされた奴は助かって、した奴の愚かな伜が死にくさった。アッハッハッハ」
そして、それからギロリと眼を光らすと、急いで笠と草鞋に這い寄った。
「もし、あなたは千葉の於菟さまではございませぬか」
於菟はびくりとして立停まった。ようやく足をもみほぐし、身仕度を整えてまだ三丁とは歩かぬ村と湯場の別れ道の川辺であった。
「どなただ？」
「於菟さまですか？」
「いかにも。してあなたは？」
「荒尾の奈々江でございます」
「荒尾の……奈々江どのがこの於菟に、何のご用か？」
「兄は何も申しませんでしたか」

「兄……と言われると春太郎どのか」
「はい」
奈々江はそういうと、怖れ気もなく於菟のそばに近づいた。矢絣りの着物に赤い帯、髪にさした飾りがキラリと月をはじくと、男兄弟の中に育った於菟の鼻腔に髪の匂いが生々しく入って来た。
年齢は於菟と同じ十五であったが、於菟が一月生れなのに、この娘は十一月生れなのだと母の話で知っている。もうすっかり大人びて、まぶしいほどの娘であった。
「あなたのお縄を解いて下さるように、兄にお願いしたのは奈々江でございます」
「あなたが……なぜだ？」
「というと兄は何も言わなかったのでしょうか」
近づくと春太郎よりずっと勝気に眼の光った、きりりと締った瓜実顔で、
「あなたは私の父の心を知りませぬ」
ぴしりときびしく押える口調で言いきった。
「昔立ったあらぬ噂で苦しめられているのは、あなたよりも父なのです。父は、あのような噂さえ立たなんだら、千葉の家とは兄弟で楽しく往き来が出来たものをと、いつも淋しげにもらしています」
「フフン」
と於菟は鼻の尖であざ笑った。
「あなたは、わざわざそれを言いにやって来たのか」
「いいえ、私は兄を探しに来たのです。私が頼んでそっと家をぬけ出て貰ったのですから」
「それで……」
「於菟さま、あなたはまだ信じない。父は……父の夢は……出来れば私を、あなたのもとへ嫁がせて、それで両家の交わりを以前の親しさにかえしたいと……」
この娘は軀だけは大きかったがまだ怖れも羞恥も知らなかった。すっと於菟に近づいて、まるで「ままごと――」の話でもするように、
「それは、それは、父はあなたの評判を気にしています。千葉の小天狗という名が出るたびに手筋、物腰、気性とたずねて、いつも千葉の大先生、お祖父さまそのままだと頬を崩してよろこびます」
「……」
「そして、一人になると私を呼んでお前が於菟吉の妻になり、二人で千葉のあとがとれたら……」
とそこまで聞くと、於菟の身内はムカムカした。相手はひどく美しい。ともすればその美しさに気押されそうになってゆく。それだけでも今日の於菟には腹立たしいのに、この娘はまるで知っていて押えつけるような口調なのだ。
「黙れッ」
と、於菟はははねかえした。

「そのような指図を他人に受けるか。千葉の家には立派に兄の又市があるではないか」
奈々江も負けていなかった。どちらも大人のつもりでいて、まだどちらも羞恥を知らぬ子供なのだ。
「於菟さまらしくもないお言葉。千葉の家系は生れた順では取らせるなと、お祖父さまの遺訓の中にありますそうな。兵法家の家は腕で継ぐのが順でございましょう」
「だ……だ……だからどうだというのだ。あなたは少しお喋舌りすぎる」
「ホホホホ。でもあなたが誤解を解きませぬもの」
「解かねばどうする？」
「分るまで言わなければなりませぬ。父は……」
と言いかけて、さすがに奈々江は、少し脱線していることに気づいたらしい。
「いいえ、今日はこれで申上げますまい。私は兄を探しに来たのです。兄とはどこでお別れに？」
今度は於菟がびくりとした。だんだん冷静になって来ると、於菟が春太郎に斬りつけたのも又脱線だった。
父の荒尾宮内を斬ったのならば、事情をのべて逐電すればあとは何とか納まろう。が息子の春太郎を失っただけではあとに宮内が残っている。宮内と父の間にどのような葛藤が捲き起されるか知れなかった。
その不安がだんだん大きくなりかけているときに、思いがけない奈々江の問いなのだ。
「春太郎どのとは……」
言いかけて於菟の額へ汗がにじんだ。死んでも嘘は言えなかった。といって真実を告げたらいったいどうなるのか。この娘は引返してそれをすぐ告げるに相違ない。
（やっぱり死ぬのか……）
と思ったとき、於菟の頭へきらりと一つの意志が湧いた。
「兄とはどこで？」
また首をかしげて訊いて来るのを於菟はいきなり抱きすくめた。不意を喰らって奈々江はかすかに声をたてた。が、もうその時には於菟の当身は奈々江の意識をうばっている。わが腕の中で、ぐったりと月にさらした白い顔。於菟はそれを眺めて、はじめて大きく溜息をついた。
「お玉おば、起きて呉れ。お玉おば」
はげしく雨戸をたたかれて、お玉後家は眼をさました。そろそろ窓は明るみかけていたが、まだうかつには戸の明けられぬ時間であった。
去年からの不作がたたって、よく泥棒が跳梁する。村外れに住んでいるひとり者のお玉後家は、中村の千葉家へ奉公していた頃に蓄めた小金を持っている。
「誰じゃ？」
と、後家は寝床の中から首を出して、用心ぶかく外の気

配に耳を澄ました。
「おれだ。於菟だ。起きてくれ」
「於菟さまか。もう一度何かいってみいや」
「何度でもいう於菟じゃ。開けて呉れ」
後家はうなずいて起き上った。それでもすぐに戸の桟は外そうとせず、節穴に眼をあててそっと外を覗いてみる。
「あれッ？」
と後家は仰天した。その筈だった。たしかに千葉家の二男於菟には違いなかったが、その於菟が肩に、一人の娘をかついで、どこから乗って来たものか一頭の耕作馬のくつわを外して裸にして、
「それ、自分の家へ帰るがよいッ」
ぴしッと馬の尻をたたきつけるところだったのだ。馬は明けかけた山霧の中へ躍りあがって消えていった。
「いったい於菟さま、どうさっしゃったえ？　そのお方は？」
お玉があわてて戸をあけると、娘をかついだ於菟吉はつかつかと土間へ入って、上りかまちの蓆の上へどたりと娘を抛りだした。
「こりゃいったいどこのお嬢さま……？」
「婆や」
「は……はい」
「おりゃこれから一戦争やらねばならぬ」
「はて、どこのどなたと」
「知れたこと。鬼首の荒尾とだ。それはとにかく、腹が減ってたまらぬ。たぶんこの娘も減っているだろう。大急ぎで飯の支度をしてくれないか」
「はいはい」
お玉後家はおろおろと入口の雨戸にまた桟をかけて、怖と娘のそばに近づいた。
「この娘が腹が空くといって……これは生きていなさるのか」
「うん生きている。いや、いま生かす」
「いったいどこの……？」
「人質だ。荒尾の娘の奈々江という」
「へえ！　ではあの荒尾のお嬢さんを浚って来なすったか」
「つべこべ言って帰せなくなったのだ。これをこっちへ取っておいて、向うの難題をさばく種にしてやろう」
すると、例の噂を信じきって荒尾宮内を憎んでいる後家は、
「それはでかしゃった！　さすがに於菟さま、でかしゃった！」
自分のことのように雀躍りして、あわてて水口（台所）の方へ走っていった。
「ご飯はいますぐ出来ますぞ。腹が減っては戦は出来ぬというすけに」

昂ぶりきって釜に米を移してゆく。
その間に於菟吉は奈々江の軀を軽々と破れ屏風のかげに運んだ。ぐったりしている女の軀のやわらかさは、何か気になる匂いと手触りを持っている。
(もし間違ったら嫁にすればいいのだろう。こいついかにもそれでいいような減らず口をききおった)
このためにあとの騒ぎがどれだけ大きくなってゆくか？そんな思慮はまだなかった。彼はぐっと奈々江を抱きおこし、左手の腋から乳房へ片手を喰わせ、右肩を堅くつかんで、
「えっ！」
と膝で背をわった。
「ウーム」
と、奈々江は唇をゆがめ、それからホーッと息を吐き、やがてぱっちりと眼を開いた。

初恋決闘

眼を開くと奈々江はあたりを見廻した。夢からさめたあとのように、静かにすんだ愛くるしい眸であった。その眸を於菟はじっと睨んでいる。

二人の視線がぴたりとあった。と、同時に、
「ヒーッ！」
と朱く小さな唇から暁のしじまをやぶる悲鳴であった。
於菟はびっくりした。
「これ、黙れッ！ 黙らぬか……」
あわてて奈々江にとびついて、その掌でしっかり奈々江の唇をおさえた。
はじめて前後の事情がわかったのだろう。唇をおさえられたまま、奈々江は息をのんでいく。於菟の掌の中で、小さく柔かい唇は生きもののようにビクビク震えた。
どちらも暫く、そのままの姿勢でじっと動かない。
いつかかまどの傍からお玉後家が飛んで来て、二人のうしろに立っていた。この後家——というよりも、わずかに三年六ヵ月しか男と共に暮した経験のない女の血の中にはふしぎな惨忍さがひそんでいる。
彼女は唇をおさえたまま、途方にくれている於菟のうしろから、
「女子の口を封ずる方法はの……」
と、於菟吉に言った。ひどく昂ぶって、舌にねばる声であった。
「女子の口を封ずるものは手ではないぞえ」
於菟も奈々江も固くなって身動きしない。
「ホホホ……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.